ふるさと好日　豪栄道関

２月27日、市ふるさと大使の豪栄道関が、市立点野小学校と府立寝屋川高校をサプライズで訪問しました。

児童と生徒は大喜びで、感激で涙を流す生徒もいました。質問コーナーは盛り上がり、市のヒーローとの交流を深めました。

また、昨年の大相撲九月場所での初優勝をたたえ、３月２日には、市から豪栄道関に寝屋川市のロゴマークが入った浴衣地が贈られました。

浴衣地贈呈式は、市議会議員や報道関係者らが見守る中行われ、豪栄道関は「今後もふるさと寝屋川を発信していきたい」と礼を述べました。

道路脇に「寿老人」

交通安全を祈って

仁和寺本町一丁目の幹線水路沿いの道路に、仙人のような置物が置かれているのを見付けました。

長いおでこに微笑みをたたえ、杖と桃らしきものを持っている姿は、七福神の「寿老人」のようです。

長寿延命の神様として知られるところから、誰かが交通安全を祈って置いたのでしょうか。

三面時計塔などを寄贈

2月22日、寝屋川中央ライオンズクラブと髙雄市中正獅子會から寝屋川市駅東側に三面時計塔が寄贈されました。

結成40周年記念事業として「市民の生活に役立てていただきたい」と申し出があり、北川市長は「寝屋川市駅周辺の利便性の向上につながります」と感謝の言葉を述べました。

また、寝屋川中央ライオンズクラブから青少年健全育成のため、寄附金が贈られました。

ふるさとねやがわ

「ハイ、寝屋川出身です」

「四代目春団治」襲名予定の 桂 春之輔師匠

来春、上方落語の大名跡「桂春団治」四代目を襲名する桂春之輔師匠（68歳）は、市出身です。忙しい中、ふるさとの思い出や襲名への心構えなどを、熱く語ってくれました。

師匠には襲名決定の発表後、道頓堀の角座で話を聞きました。当日は朝から在阪テレビ局の取材を受ける慌ただしさ。それでも、楽屋での表情は、にこやかな自然体でした。

「ハイ、寝屋川出身です。当時、萱島の駅の近くに緑色の診療所がありましてね、よう覚えています。懐かしいですな」

実家は幼稚園の頃に豊中市に転居しましたが、下神田町に親しい農家があり、中学生の頃まで、休みになると訪れたという。

「周りは田んぼで、かえるの鳴き声がよう聞こえましたな。盆踊りが盛んで、河内音頭の生演奏やアセチレンガスの臭いを覚えています。井戸で冷やした瓜（うり）はおいしかったなあ」

幼い頃の思い出は強烈で、今も小さな川沿いを歩いている夢をよく見るそうです。京都で仕事があるときはできるだけ京阪電車に乗り、車窓から市内を眺めるといいます。

府立桜塚高校時代、一つ先輩のSF作家かんべむさしさんと落語研究会を作りました。その頃、三代目桂春団治に電話で入門を乞い、「うちはうどん屋やない」と断られたそうです。

結局、角座で待ち伏せして入門の許可をもらい、高校卒業と同時に内弟子になりました。

「師匠の芸風が好きでね。（演目の）『代書』や『いかけ屋』という仕事は、今はもうありませんが、理屈抜きに面白い」

初代・桂春団治は破天荒な振る舞いで、歌や芝居で知られます。「爆笑王」といわれ、二代目もその芸風を引き継ぎました。三代目は逆に、繊細、華麗な表現を得意としました。

「四代目になれたらええなあ、と思っていた頃が一番、幸せでしたな。（襲名披露では）足が震えるかも知れません。ちょっと、謙遜やけど（笑）」

三代目にはよく叱られ、家を放り出されたこともあるそうです。それでも「お前は別や」と可愛がられ、襲名を認める遺書を残してくれました。

「どんな春団治になるか師匠も苦労しました。ぼくは二人がやらなかった人情噺（ばなし）で、次の五代目が苦しむようにしたいと思っています」

市出身の大関・豪栄道関とは親しい間柄。

「彼は大器晩成型で、ゆっくり横綱になればええ。ぼく自身もそうやから（笑）」

初代、二代目、三代目（左から）